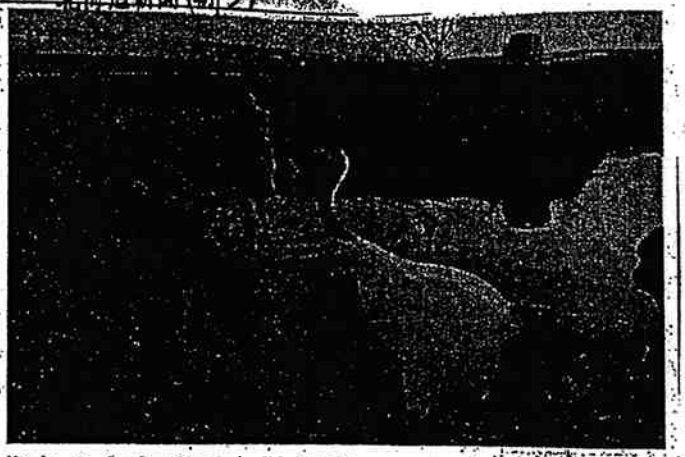
1．関連報道記事

2004.11.13　北海道新聞　朝刑

16.11.13
北海道新聞（朝・夕）



モデル事業では、阿寒国際ツルセンターで給餌や掃除などの作業を体験してもらう

奉仕活動に阿寒へおいで

モデル事業あすスタート

消費拡大、定住促進狙う

【阿寒】過疎化の進む地方で、大都市の住民がボランティア活動をしながら長期滞在する「ボランティアホリデー」のモデル事業が、阿寒町で十四日から始まる。国土交通省が来年度からの事業化を目指しているもので、同町も将来は多くのボランティアを受け入れ、町内での消費拡大や定住促進につなげる考えだ。

都市と地域との交流、地域経済の活性化などの効果が期待されている。モデル事業は、道内では阿寒を含め計四カ所で同時期に実施。道外では山形、高知、鹿児島の三県でも今年十二月にかけて行われる。

国交省は、モデル事業での反省点などを参考に、来年度から本格的にボランティアホリデーを推進する方針。低予算で通常の観光では体験できない長期滞在を希望する人を対象に、ホームページでボランティア参加者を募集する一方、受け入れる自治体も全国に呼びかける計画だ。

今回、阿寒町では、奈良県の五十代女性と兵庫県の六十代女性がモニターとして一週間滞在する。阿寒国際ツルセンターでタンチョウの給餌や、移動図書館バスで本の貸し出しなどを手伝う。

町まちづくり推進課は「ボランティアには、夏ならマリモの保護活動などたくさんのメニューを用意したい。道内への移住を考えている本州の人には、阿寒町での生活を試してもらえる」と意欲的。中島守一町長も「この事業で阿寒町のリピーターが増えるかもしれない」と期待を寄せている。

（本郷由美子）

2004.11.13　北海道新聞　夕刊

ボランティア体験で道東知って

ツル飼育、遺跡復元…

道運輸局は十四日から一週間、都市部の住民がボランティア活動をしながら地方に滞在する「ボランティアホリデー」のモニター実験を、道東の四町で行う。国土交通省が本年度始めた事業の一環で、地域の魅力を都市部の人たちにPRし、観光を生かしたまちづくりにつなげる。

実験地は網走管内斜里町、同常呂町、同女満別町、釧路管内阿寒町で、自然が豊かな北海道らしい景観が楽しめることなどが理由。道外では東北、四国、九州の各地域でも同様の実験が進んでいる。

都市住民招き4町で実験

道運輸局あすから

モニターは東京と大阪の二十～五十歳代の男女八人で、二人一組で四町に分かれて行動。受け入れる町は、ツルの飼育（阿寒町）や遺跡の復元（常呂町）など、まちの特色が光るユニークなボランティア活動を用意している。

道運輸局はモニター実験の結果をもとに、年明けに有識者を交えた検討会を開き、自治体が自主的に運営できるような体制や、国としての支援のあり方を探る。

2004.11.17 北海道新聞　朝刊

ツルに給餌…感激

国のモデル事業 関西の主婦が体験

阿寒

ケージ内の掃除など、タンチョウに接する機会を楽しむモニターの2人（後方）

【阿寒】大都市の住民がボランティアをしながら過疎化の進む地方に長期滞在する「ボランティアホリデー」のモデル事業が、十四日から道東の四町で始まった。このうち阿寒町では十六日、関西から参加したモニター二人が阿寒国際ツルセンターで、タンチョウへの給餌などを手伝った。

国土交通省が本年度から始めた事業。阿寒町を訪れたのは主婦の岡林好子さん(六二)＝兵庫県＝と岡村伸子さん(五七)＝奈良県＝。餌の量を記録しながらタンチョウに給餌したり、タンチョウが住むケージ内で池の掃除などを行った。

岡林さんは「タンチョウが自由に動ける場所に自分が入れるなんて！」と貴重な体験に感激。岡村さんは「ボランティアに雪かきなどのメニューがあれば、雪のない地域から来る人も多いのでは」と提案していた。

二人は移動図書館バスでも本の貸し出しなどを手伝い、二十日まで同町内の保養施設に滞在する。主催する道運輸局はモニターの意見などを参考に、ホームページや受け入れ組織を整備し、来年度から事業を本格化させる方針だ。

（本郷由美子）

2004.11.17 朝日新聞　朝刊

長期滞在ボランティア

国、道東4町で実験

阿寒でタンチョウ世話／常呂では遺跡復元…

都市・地方の交流拡大へ

都会に住む人たちが、ボランティア活動をしながら長期滞在する新しい都市と地方の交流事業「ボランティアホリデー」のモニター実験が、道東の4町（阿寒、斜里、女満別、常呂）で繰り広げられている。国土交通省の事業で「イベント主体の一過性の交流事業ではなく、長期的な交流人口の拡大を目指す」という。

モニター実験は北海道と山形県で先行し、今月末に高知、鹿児島県でも予定されている。道内では北海道運輸局が4町と検討委員会を発足し、ボランティアのメニューを決めた。滞在は14日から20日まで。関東や関西から各町に2人ずつ入った。

阿寒町では16日、神戸市の岡林好子さん(61)と奈良県上牧町の岡村伸子さん(57)の主婦2人が阿寒国際ツルセンターで、職員の指示を受けながらタンチョウを間近に見ながらケージの清掃作業を手伝う岡林好子さん（左）と岡村伸子さん＝釧路支庁阿寒町の阿寒国際ツルセンターで

ケージに入り、タンチョウへの給餌や池の底にたまった落ち葉などの清掃作業を手伝った。

2人は子育てを通じて知り合った友人。名所旧跡を慌ただしくまわる旅ではなく、滞在型で普通の旅行では出来ない体験ができることにひかれて応募し、第一希望だったツルの世話がメニューにある阿寒町に決まった。

目と鼻の先までツルに近づいた2人は「優雅で美しいというイメージはなく、大きくて力強さを感じた」などとうれしそう。岡林さんは「雪かきやお年寄りの話し相手などもメニューにあったらいい」、岡村さんは「夫婦だったらもっと長い滞在ができるのでは」などと話していた。

2人は17日は阿寒湖畔地域での移動図書室を手伝い、18日は再びツルの世話や、団体客があればツアーガイドの手助けをする。

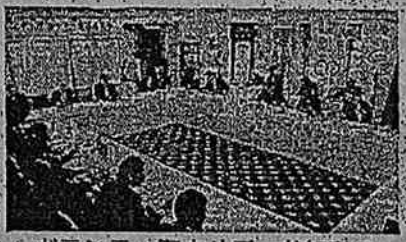
斜里では知床博物館でオオワシやエゾシカの飼育、女満別では長イモ掘りなどの農作業、常呂では遺跡の整理や復元などを手伝っている。

2005.3.8　北海道新聞　朝刊

事業紹介のＨＰ開設へ

広がれボランティアポリデー

阿寒 町、観光業界委員らが会合



ボランティアポリデー参加者の増加策などを考えた検討会

【阿寒湖畔】大都市の住民が、過疎化の進む地域に滞在し、ボランティア活動をしながら交流する「ボランティアポリデー事業」の本年度第三回検討委員会（北海道運輸局など主催）が七日、町阿寒湖温泉のホテルで開かれ、事業を紹介するホームページ（ＨＰ）を四月に開設する計画などが報告された。

阿寒町など地元自治体や、観光業界などから委員二十一人が出席。同事業は国土交通省が〇四年度から始め、道内では阿寒と、網走管内の斜里、常呂、女満別各町でモデル事業が行われている。阿寒には昨年十一月、関西から女性二人が来町し、一週間ほど夕ンチョウの給餌作業をした。

この日の委員会では「参加者が何度も来られるよう、格安ボランティアバックの陪花を」などの提案があった。ＨＰは http://www.yoi-h.org/（大場俊英）

2004.10.22　河北新報

平成１６年(2004年)１０月２２日(金曜日)

農作業に従事しながら観光も

山形でモデル調査

運輸局と4市町　交流内容など提言

ボランティアホリデー

東北運輸局は、大都市の住民がボランティア活動をしながら地方に長期滞在する「ボランティアホリデー」＝㊟＝のモデル調査を山形県内の四市町で実施する。来月八日に検討委員会を発足させ、来年三月まで滞在地域に合ったボランティア活動内容や交流プログラムについて調査・検討し、その後に本格的な事業導入を目指す。

モデル調査を実施するのは、山形、天童、東根、河北の四市町。果物の産地で、温泉、山などの観光資源が豊富なことから、山形県中央部のエリアが東北で唯一選ばれた。調査は北海道と高知、鹿児島両県でも同時に行われる。

検討委員会は、四市町の民間非営利団体（NPO）関係者ら約二十人で構成し、天童市役所で初会合を開く。滞在地域が提供したいボランティア活動内容、大都市住民が期待する交流プログラムなどを調べ、運営体制の検討などと合わせ提言としてまとめる。

四市町の交流プログラムを盛りこめたパンフレットや、全国のボランティア希望者と滞在先を仲介するホームページ（HP）を作成する。各市町に二人のモニターを募り、実際に一週間程度、滞在しながら簡単な農作業などに従事してもらう試験プログラムもつくる。

東北運輸局はモデル調査費約千三百万円を本年度予算に計上している。

二〇〇七年度から続々と定年退職を迎える「団塊の世代」の生きがいづくりが狙い。地方にとっても都市住民との交流が深まり、新しい産業の創出や人材育成、ボランティア活動の活性化などの効果が見込まれる。

天童市の長瀬一男観光物産課長は「都市部の住民は従来の物見遊山の観光に満足しなくなっている。HP作成など知識・技術を生かせる社会貢献の場を提供したい」と話している。

㊟ボランティアホリデー　都市部の住民が地方に滞在し、ボランティア活動をする交流事業。代わりに宿泊割引などの特典がある。働きながら外国に滞在できるワーキングホリデーのボランティア版で、都市部と地方の交流人口の拡大が狙い。ボランティア活動に従事しながら語学学習する留学プログラムの意味もある。

2004.10.23　山形新聞

ボランティアしながら滞在

県内3市1町を指定

国交省モデル　首都圏から受け入れ

国土交通省東北運輸局は、大都市圏の住民がボランティア活動をしながら地方圏に一定期間滞在する「ボランティアホリデー」の可能性を調査するモデル事業を、東北では山形、天童、東根、河北の三市一町で行う。四市町の観光、民間非営利団体（NPO）、地域住民、行政などの関係者で組織する検討委員会を発足させ、首都圏や受け入れ地域でのニーズ調査、公募モニターによる実証事業などを展開。本格導入を視野に、地域に合ったボランティア活動内容や適正な交流プログラムなどを吟味する。

同運輸局は、受け入れ地域に対するヒアリングや大都市の住民を対象にした千人アンケートなどを行うほか、来月十四―二十日には、公募モニターを実際に招いての実証事業も行う。四市町による検討委は本年度内に運営体制や支援の在り方なども含めた提言をまとめる。

また、来年一月末ごろをめどに、企画の参加希望者と受け入れ地域をつなぎ、本格稼働に向けて情報発信するため、インターネットのポータルサイトも立ち上げる予定。

検討委の初会合は、来月八日に天童市役所で開く。この事業は、本年度の国土施策創発調査として国交省などが北海道、四国、九州の各運輸局で行う。東北運輸局の調査費は約千三百万円。

ボランティアホリデーは、都会で定年期を迎えた人や若者が、一定期間の休暇などを利用し地方に滞在。自分の知識やノウハウを生かしたボランティアを行いながら地方の暮らしや観光を体験するもの。都市と地方の交流人口拡大を図り、地方の経済活性化や魅力創出につなげる狙いがある。

2004.11.9　河北新報

滞在ボランティア　受け入れ方や運用方法探る

天童で検討委　大都市の住民がボランティア活動に携わりながら地方に長期滞在する「ボランティアホリデー」の運用方法を探る検討委員会（大島美恵子委員長）が八日、天童市であり、十四日から山形市などで実施するモニターツアーについて協議した。

モニターは関西のシニア世代を中心に山形県の四市町に二人ずつ、二週間滞在し、果物の収穫や観光案内などのボランティア活動を行う。天童市では天童高原新そば祭りにスタッフとして参加し、空いた時間を高原散策などの観光に費やす。

受け入れ側からは「ボランティアに対する若者や中高年のニーズは多い。受け入れ先とうまくマッチさせることが重要」「受け入れ側に負担が大きく、報酬が必要ではないか」などの意見が出た。

検討委は東北運輸局の主催で、山形、天童、東根の三市と河北町の観光担当者、民間非営利団体（NPO）関係者らで構成。都市住民の意向や活動プログラムについて調査、両者を仲介するホームページの作成やコーディネーター育成を行う。

2004.11.9 山形新聞

委員長に大島氏

東北ボランティアホリデー検討委 初会合で選出

国土交通省東北運輸局の「ボランティアホリデー」モデル事業エリアに選ばれた県内四市町の関係者による「東北ボランティアホリデー検討委員会」の初会合が八日、天童市役所で開かれ、今後の事業展開や課題などについて意見を交換した。

ボランティアホリデー事業は、大都市の住民がボランティア活動をしながら地方圏に一定期間滞在し、地域との交流を深めるもの。同運輸局は本年度、山形、天童、東根、河北の三市一町をモデル地域に選び、調査や実証実験を展開する。

この日は、各市町の観光、民間非営利団体（NPO）、行政関係者や国交、総務、農林水産省の担当者など委員二十一人が出席。委員長に大島美恵子東北公益文科大副学長を選んだ。事業概要のほか、今月十四日から六泊七日の日程で、各市町ごとに行うモニターツアーや、都市部の住民千人を対象にしたニーズ調査などの説明を受けた後、意見交換に入った。

委員からは「受け入れる側の負担なども考えられ、両者の調整を図るコーディネーターの育成が大事」「地域特性を考慮した受け入れメニューの開発が重要」「互いに考えず気楽に取り組める態勢をとっていきたい」などの意見が出た。

本年度三回の会合を予定しており、次回は山形市で来年一月十七日に開く。

2004.11.18　山形新聞

「ボランティアホリデー」モデル事業

メニューや態勢どう？

山形など4市町　モニター招き実験

リンゴ収穫、イベント補助、地域との交流

国土交通省東北運輸局が県内で展開する「ボランティアホリデー」事業のモデルエリアとなっている山形、天童、東根、河北の三市一町で、県外モニター八人を招いてのモデル事業が繰り広げられている。来年度以降の本格実施に向けた実証実験。モニターは二十日までの日程で、農作業やイベント補助などのボランティアを行いながら各市町に滞在。活動メニューや受け入れ態勢などについて率直に意見、感想をまとめる。

「ボランティアホリデー」モデル事業のモニターとして、果樹園でリンゴの収穫作業を手伝う石村進さん、昌子さん夫妻（手前）＝天童市

農産物の袋詰め作業を体験する森本陽子さん（左）と松田典子さん＝東根市

ボランティアホリデーは、大都市圏の住民がボランティア活動をしながら地方圏に一定期間滞在し、地域との交流を深める事業。同運輸局は本年度、県内の三市一町をモデル地域に選定し、調査・検討を進めている。

受け入れ態勢の整備などに向けた課題を探るために行うのが、モニターによる実証ツアー。対象地域ごとに、県外から公募したモニター二人ずつを受け入れ、実際にボランティアホリデーを体験してもらう。

山形市では、ハウス栽培の食用菊の収穫やパック詰め作業など。天童市では、リンゴの収穫作業やイベント補助、宿泊を兼ねた天童高原ロッジの夜間宿直などのメニューを用意した。

東根市では、リンゴの収穫や共同選果場での仕分け、直売所での販売などを行うほか、河北町ではリンゴ、ラフランスの選果や箱詰め、バラの芽摘み、野菜収穫などを手伝うプログラム。いずれも、作業時間以外は、観光や体験を楽しみ、地域との交流を深めている。

このうち、天童市を訪れた石村進さん（六二）、昌子さん（五七）夫妻＝大阪府牧方市＝は「従来の観光旅行やボランティア活動とは違った形での交流が面白そうで応募した。農作業にかける土地の人の本当の姿が見えるし、楽しい話も聞くことができてうれしい」とにっこり。

東根市のモニターを務める森本陽子さん（二二）＝兵庫県明石市、大学生＝と松田典子さん（二四）＝同県宝塚市、大学院生＝は「多くの人と触れ合い、兵庫県に戻ってからも情報交換できる関係が生まれたらうれしい」と話していた。二十日には、モニター全員が集まり、関係者と意見交換する。

2005.3.2　山形新聞

ボランティアホリデー事業
05年度、本格導入
県内4市町

首都圏から農業体験などのボランティアを迎え、交流人口を拡大しようという国土交通省東北運輸局などの「ボランティアホリデー」事業で、モデル地区の指定を受けた県内三市一町の関係者らによる東北ボランティアホリデー検討委員会が一日、東根市役所で開かれた。検討委は、二〇〇五年度にホームページ（HP）を開設し、三市一町で事業を本格導入することを決めた。

都会の人たちが地方に一定期間滞在し、ボランティア活動を通じて地域との交流を深めるもので、北海道、東北、四国、九州の四地方で本年度、実施した。東北では、東根、天童、山形、河北の三市一町がモデル地区となった。八人がモニターとして実際に体験。検討委は、実績について調査・検討を進めてきた。

この日の会議では、三市一町が〇五年度の事業に本格的に参画することを決定。農作業体験やイベントの企画・運営、観光地整備といった提供できる活動メニューを示した。同時に、各市町が受け付け窓口を暫定的に担当し、事務局を担うコーディネーターの発掘、養成を進めることにした。

また、今年四月に開設するHPの内容なども検討した。一方、本年度のモデル事業を通じ、同運輸局などは計五万部のパンフレットを作り、広報することにした。

2004.12.4 高知新聞

高知の暮らし体験中

8人がボランティアホリデー

安芸市、夜須町、大方町、西土佐村

都市と地方の交流人口拡大をと、国土交通省が取り組む「ボランティアホリデー」のモニターツアーが四日まで、安芸市など県内四市町村で行われている。参加者は普段、都会ではできない農作業などを体験し、心地よい汗を流している。

ボランティアホリデーは、都市住民が地方に民泊などで長期滞在し、ボランティア活動を行って地域住民と交流。地域活性化にもつなげようと、同省が本県や北海道などで実施。県内では安芸市、香美郡夜須町、幡多郡大方町、西土佐村がモデル地区となっている。

本県でのモニターツアーは十一月二十八日からで関東や関西の大学生、企業の退職者ら八人が四市町村に滞在している。

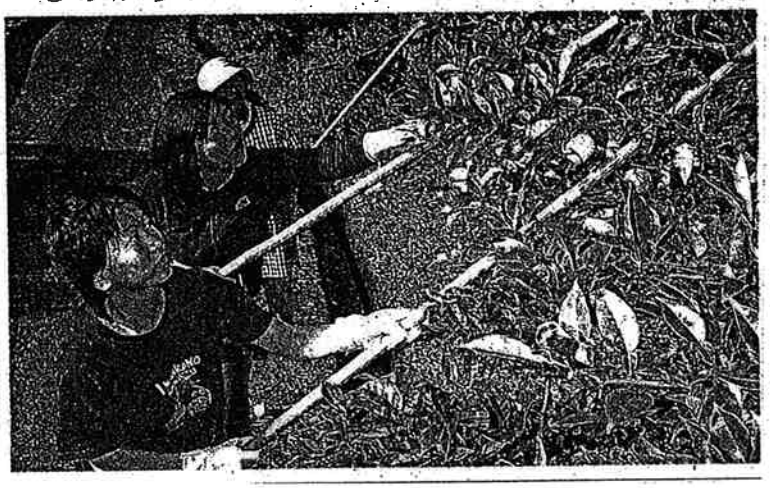
大方町ではシカゴ大大学院生の小林眞さん(三六)=東京都=と、無職の小川敬史さん(二九)=千葉県=が天日塩や黒砂糖作りを体験。三日は伊田漁民センターで干物作りに挑戦した。

㊨魚のさばき方を教わるボランティアホリデーの参加者（大方町の伊田漁民センター）㊨ユズの収穫を体験する大学生（安芸市入河内）

町漁協伊田支所女性部のメンバーから魚のさばき方を教わり、小林さんは「骨に沿って包丁を動かすのがとても難しい」と四苦八苦。小川さんは三枚おろしなどを行い、メンバーも「なかなかうまいじゃいか」。小林さんは「ボランティアに興味はあったが、参加する機会がなかった。今回は体験メニューも用意してくれ、気軽に参加できた」と話していた。

安芸市では明治大四年の篠田宏美さん(二一)=東京都=と、早稲田大三年の藤田圭子さん(二一)=千葉県=がナスの収穫や内原野陶芸館で土練りを体験。三日は入河内地区でユズの収穫を手伝った。

篠田さんは「高知の人は温かい。でも、若い人がほとんどいない地区もあって驚いた」。藤田さんは「ナス農家でハチを使う先進的な取り組みを知った。新鮮な体験がたくさんできた」と喜んでいた。入河内の女性(五六)も「田舎を知ってもらうだけでも価値がある」と笑顔で話していた。



2004.10.5 日本経済新聞

休暇は地方でボランティア

運輸局がモデル事業

観光活性化ねらう

九州運輸局は、東京や大阪など大都市の住民がボランティアをしながら地方に一定期間滞在する「ボランティアホリデー」事業に乗り出す。年内に鹿児島県内でモデル事業を始め、今後拡大する方針。都市と地方との交流を促し、観光活性化や雇用創出につなげたい考えだ。

モデル事業の対象地域は、鹿児島県出水、阿久根両市など同県内の二市四町。地方からは、人手の必要な繁忙期の農作業といったボランティア需要を市民団体、自治体から募る。東京、大阪両都市圏の住民には地方で体験してみたい内容を調査する。

例えば都市住民が一週間程度の休暇を利用し、ボランティア先の民家に宿泊しながら地方での暮らしを体験する、といったプログラムを地域ごとに作成する。

同事業は九州のほか、北海道、東北、四国の各運輸局も乗り出す方針。受け入れ側と希望者との橋渡しのため、四地域共同でボランティア需要を一覧できるホームページも立ち上げる。

九州運輸局は「大都市圏との交流が地方の自立につながれば」としている。

2004.10.5 南日本新聞

ボランティアし長期滞在

阿久根など2市4町

受け入れ可能か調査

九州運輸局

九州運輸局は四日、都市部の住民がボランティア活動をしながら地方圏に長期滞在する「ボランティアホリデー」にかんする調査を、阿久根市など周辺二市四町で行うと発表した。ボランティアを通して都市部と交流を広げ、地域の活性化につなげる目的。

調査地域は阿久根市のほか出水市、高尾野、野田、長島、東の各町。

計画では、九州運輸局が十、十一月に、宿泊施設や観光業者、ボランティア団体、交通機関などにヒアリング調査し、受け入れ可能なボランティア活動を吟味する。都市部の住民がどのようなボランティアをしたいか東京、大阪でアンケート調査を実施、十二月には実際にボランティアを招き、約一週間モデル事業を行う。最終的には受け入れ先にかんする情報をインターネットで紹介する予定。

同調査は二〇〇四年度の単年度事業で、北海道、東北、四国の自治体で同様の調査がある。

2004.11.29 朝日新聞

青鉛筆

▽農作業や焼酎づくりを手伝いながら田舎暮らしはいかが――。国土交通省が29日、鹿児島県の北薩地区でボランティアホリデーのモニターツアーを始めた。

▽新しい旅のスタイルを模索する6泊7日の企画。初日は関西や関東から応募した8人が、高尾野町の観光ブドウ園で枝の剪定などに取り組んだ＝写真。

▽座禅体験の寺掃除やみそ造りもある。農家民泊の旅が広がりつつある中で、旅費は公費負担の実験。成功のカギは「そこがみそ」と呼べるようなアイデアか？

2004.11.30 西日本新聞

出水地区でボランティアホリデー制度

モニター8人が体験調査に参加

ブリ出荷やポンタン収穫など

国が推進する「ボランティアホリデー」制度の確立を目指し、同制度の体験調査が二十九日、高尾野町など出水地区で始まった。

同制度は大都市圏の住民が地方に長期滞在しボランティア活動をすることで交流人口を増やし、地域活性化につなげようとするもので国土交通省と総務省が連携して推進する事業。今年初めて北海道、東北、四国、九州の四カ所で公募のモニターがボランティア体験を通して調査を行う。

九州は同町や出水市、阿久根市など二市四町で実施。大学生や六十代の主婦ら八人のモニターが東京や大阪などから参加し、十二月三日まで東町でブリの出荷作業や阿久根市のポンタン農家で収穫作業などを手伝う。

この日は高尾野町のブドウ農園と長島町のジャガイモ畑で四人ずつ分かれて作業。ブドウ農園では枝切り作業や草取りなどを手伝った。東京で美容室を経営し、農業に興味があり参加した西森章さん(五九)は「都会のシニア世代には魅力ある事業になるのでは」と評価。ブドウ農園を経営する神之田玄一さん(四二)は「意欲のある人に来てもらえば助かるし、刺激にもなる。いい企画でいつでも受け入れたい」と話した。

国はモニターや受け入れ先からのアンケート調査を基に具体的な運営方法を検討する。

神之田さん（左）のブドウ農園の枝切り作業を手伝う大学生ボランティアたち

2004.11.30　西日本新聞

九州運輸局

鹿児島でモニター調査

○長期滞在型ボランティア

国土交通省九州運輸局は、都市の住民が地方に長期滞在し、ボランティア活動をする「ボランティアホリデー」普及を目指して、鹿児島県内でモニター調査を始めた。

調査は、東京都と大阪府在住の男女八人がモニターとなり、二十八日から十二月四日までの六泊七日の日程で同県内の出水市、阿久根市など二市八町に滞在。ジャガイモ掘りやブリ出荷作業、ミカン農家のボランティアなどを行う。同運輸局が最終日に参加した印象や楽しかったことなどのモニターの意見を集約する。

調査結果は、学識経験者などで構成する「九州ボランティアホリデー検討委員会」が別に実施した受け入れ先のニーズ調査などとあわせて検討し、来年三月に報告書をまとめる予定。

同運輸局によると、モニター調査は国交省のモデル事業として、北海道、東北、四国、九州の四運輸局で実施している。これらの調査結果を踏まえ、国交省が大都市圏と地方圏の交流人口拡大策となる「ボランティアホリデー」の仕組み確立を目指すという。

2004.11.30　西日本新聞

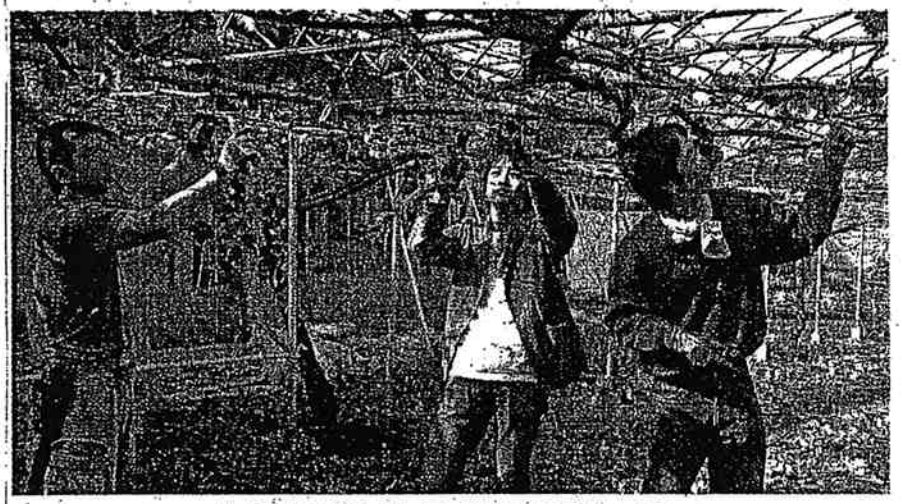
☆ボランティアホリデー制を体験

鹿児島　大都市の住民が地方に長期滞在し、ボランティア活動することを通して交流人口を増やそうという「ボランティアホリデー制度」の体験調査が高尾野町などで始まった。参加者は農作業などを手伝う。

2004.12.1　読売新聞

都会からボランティア

農業体験など 長期滞在で活性化や交流



神之田さん（左端）の手ほどきを受けながら、ブドウの枝切りをするボランティアモニター　12/1 読

過疎化に悩む地域に都市部からボランティアを招き、長期間滞在してもらうことで、地域の活性化や交流人口拡大につなげようと、国が実施している「ボランティアホリデー・モデル事業」が、高尾野町などで始まった。

国のモデル事業　高尾野などで始まる

ボランティアホリデーは、都市部の住民が余暇を利用して、農山村の民家やキャンプ場などの施設で過ごしながら、地元で農作業などの手伝いを無償で行う取り組み。国土交通省と総務省は今年度、北海道と山形、高知、鹿児島県でモデル事業を実施。県内からは、出水市や長島町など出水地区の二市四町がモデル地域に選ばれた。

関東や関西在住の二十歳代から六十歳代までのモニター八人が参加。このうち四人は十一月二十九日、高尾野町の観光ブドウ園で、来年の収穫に備えて、ブドウの枝切りや雑草の除草などを手伝った。

東京都板橋区の美容師、西森章さん(59)は「農業にあこがれがあったが、体験を通じて、農業の難しさや大変さを実感できた」と満足そうだった。

農園主の神之田玄一さん(41)は「普段は接することのできない都市の人たちと交流できて、いい刺激になりました」と話した。

モデル事業は、十二月四日までで、ミカン農家やブリの出荷作業、土産品店などでボランティアを行う予定。

2004.12.21　西日本新聞

スローに生きる

新田舎暮らしの波 ⑩

都市のニーズ　眠る地域の素材に光

「ミニトマトは青いまま採って出荷しても店に並ぶころは赤くなる。でもね、樹上完熟のほうが断然甘いんだ」

十一月末、根占町のトマト農家田淵悦二さん(五三)が自分のハウスで、農業を体験中の鹿児島市の会社員らに説明した。

都市と地方の交流人口を増やそうと、県と地元市町が実施した「南大隅体験型ツアー」だ。参加したのは県内のモニター十人。各農家に一日民泊し、よもぎだんご作りや佐多岬トレッキングなどのメニューも組まれている。

田淵さんにとっては、農業へのこだわりを消費者に直接伝える場だ。「樹上完熟で赤く色づいたトマトを、いかに早く市場に送るかが勝負。流通の都合よりもおいしい物が優先」

モニターらは「スーパーで買うトマトに、当たり外れがある理由が分かった」とうなずいた。

■　■　■

十二月中旬、ミカンがたわわに実る出水市美原町の農園。国土交通省と総務省の共同事業「ボランティアホリデー」の体験調査で、東京や大阪から訪れた男女四人が収穫作業を手伝っていた。

真鍋勝利さん（右）の説明を熱心に聞くボランティアホリデーの参加者ら＝出水市美原町

「枝は短く切ってください。箱に詰めたときミカンに傷が付きます」

ミカン園を営む真鍋勝利さん(四〇)が手を休めることなくアドバイスする。ボランティアらは見よう見まねでハサミを入れる。

東京都板橋区の美容師西森章さん(五九)は初めての体験に興味津々だ。趣味はガーデニングや庭園管理などの土いじり。「こうして農家にじかに接していると、愛情を持って仕事をしている様子がよく分かる」と語った。

ボランティアホリデーの調査は一週間。総勢十人の都市住民が出水のミカン園のほか阿久根市のポンタン農家や東町のブリ漁師の仕事などを体験した。

都市と農山漁村による交流のあり方をめぐり、さまざまな形で模索が続いている。

■　■　■

「都市に住む人たちの旅行目的は依然として『温泉と食』が上位だが、農村や自然に触れる旅を欲する人が増えているのは確か」

南大隅体験型ツアーをコーディネートした出版会社、マインドシェア九州(福岡市)の日永田一郎さん(三七)は都市側のニーズを実感する。農家の生活の知恵や長老らの話も重要な観光素材の一つになり得るというわけだ。

ボランティアホリデーの企画を取り仕切った富士通総研(東京都港区)の安藤日出夫さん(四二)は「ボランティアがミソなんです」と打ち明ける。

余暇は田舎でゆったり過ごしたいと望んでも、通常の体験観光は表面だけに終わりかねない。一方、一般的なワーキングホリデーは賃金や報酬が絡むため敷居が高い。「その中間がボランティア。地元の産業に役立ちながら滞在することで満足感もある」と安藤さんは見込む。

都市から見れば、スローな鹿児島の田舎暮らしは手つかずのまま眠る地域資源と言えないか。本格的な余暇時代を前に、その可能性に光が当たり始めた。

（取材班・山野俊郎）

＝第四部おわり＝

第五部は東町のカンパチなど海外に輸出される県産品をEUやアジアで現地ルポします。来年一月掲載予定。

かごしま動く

連載へのご意見は「かごしま動く取材班」へ。手紙〒890-8603(住所不要)ファクス099(256)1378▽電子メールugokue373news.com

年間連載第4部